考古学研究所アルカ提供

Archaeological Laboratory,Co.,Ltd.

アルカ通信

ARUKA Newsletter

NO.110
2012.11.1

＊考古学研究所（株）アルカは石器と土器の実測・整理・分析を強力にバックアップする企業です。

阿玉台式土器 －東関東に花開いた特異な中期縄文土器－

塚本師也

第４回 阿玉台式土器の研究史(2)

戦後になると江坂輝彌による阿玉台式土器に関する分布を扱った論考（江坂1949）、千葉県加茂遺跡の報告での五領ケ台式からの系譜の指摘（松本ほか1952）、ジェラード・グロード、篠遠喜彦による姥山貝塚報告での分類（J.グロード・篠遠喜彦1952）等がみられる。今回は、現在広く用いられている阿玉台式土器の細分を行った西村正衛の研究を取り上げる。

1950（昭和25）年、西村正衛は千葉県小見川の白井大宮台一角の通路貝塚、雷貝塚を発掘調査する。1952・1953（昭和27・28）年にも雷貝塚を調査する。雷貝塚の報文（西村1955）では、出土した五領ケ台式土器、下小野式土器および阿玉台式初頭の土器を八つに分類した。1～3区の出土地点の土器様相の差異を、貝塚の形成過程から層位的な関係とみなし、五領ケ台式、下小野式が型式学的に変化して阿玉台式が成立することを示した。また、宮平貝塚の阿玉台式土器（阿玉台Ib・Ⅱ式）との違いから、阿玉台古式（後の阿玉台直前型式、阿玉台Ia式）の存在を示唆した。現在も用いられる「雷七類」等の呼称は、この報文が典拠である。

三郎作貝塚、向油田貝塚、阿玉台貝塚、木内明神貝塚等の調査を経て、「利根川下流域における縄文中期文化の地域的研究（予報）」を発表する（西村1960）。阿玉台式を発生的様相、古式的様相、発展的形態、末期的様相、終末期の状態に5細分した。

1969（昭和44）年の木之内明神貝塚の報告で、第I類a種、第I類b種、第Ⅱ類、第Ⅲ類、第Ⅳ類の細分を発表する（西村1969）。木之内明神貝塚Aトレンチでは、第一純貝層から阿玉台Ib式が出土し、以下の層出土の下小野式、五領ケ台式、阿玉台直前型式（雷貝塚三区主体の土器）、阿玉台Ia式と分離された。阿玉台貝塚Aトレンチの第六層混貝土層下部、最下層の純貝層から、阿玉台直前型式を混じえずに阿玉台Ia式が出土し、第六層混貝土層およびそれより上の第三層純貝層、第四層準純貝層から阿玉台Ib式が多く出土した。Ⅱ式、Ⅲ式、Ⅳ式は層位によって明確に分離できなかったが、上層における出土量の増大という傾向を把握した。1972（昭和47）年に阿玉台直前形式を追加し、「阿玉台式土器編年的研究の概要」として完成をみる（西村1972）。1981（昭和56）年には村田貝塚の報文で、阿玉台Ⅳ式と中峠式との関係に触れる（西村1981）。自身の研究の集大成として『石器時代における利根川下流域の研究』を上梓するが（西村1984）、雷貝塚の土器の拓影等を新たに図示した。当初の報文では肝心な土器の図が無く、西村の元で土器を実見した者のみが理解し得た経緯があるが、これにより理解が広まった。

西村の阿玉台式土器の編年は、層位学的方法と型式学的方法の両方に裏打ちされている。また、各細分型式の違いが、施文具の差として、小破片であっても明確に識別できる。かつて「勝坂式」とされることもあった阿玉台Ⅲ・Ⅳ式は、西村によって阿玉台式後半に位置付けられた。阿玉台式が関東地方西部や中部地方にも分布が及ぶの対し、勝坂式が利根川下流域にはみられないことにも注目した。他にも、下小野式を東関東的な五領ケ台式の粗製土器として位置付け、東関東の加曽利E式の中に阿玉台式の伝統があることも指摘した。

［参考文献］
江坂輝彌、1949、「阿玉台式文化の地域圏」『両毛古代文化』1
西村正衛、1955、「千葉県香取郡小見川町白井雷貝塚（第二・三次調査）」『早稲田大学教育学部学術研究』第3号
西村正衛、1960、「利根川下流域における縄文中期文化の地域的研究（予報）」『古代』第34号、早稲田大学考古学会
西村正衛、1969、「千葉県小見川町木之内明神貝塚－東部関東における縄文中・後期文化の研究－其の一」『早稲田大学教育学部学術研究』第18号
西村正衛、1972、「阿玉台式土器編年的研究の概要－利根川下流域を中心として－」『早稲田大学大学院文学研究科紀要』第18輯、早稲田大学大学院文学研究科
西村正衛、1981、「茨城県江戸崎町村田貝塚（第一次調査）－東部関東における縄文中・後期文化の研究－其の五」『早稲田大学教育学部学術研究』第30号
西村正衛、1984、『石器時代における利根川下流域の研究－貝塚を中心として－』早稲田大学出版部
松本信広・藤田亮策・清水潤三・江坂輝彌、1952、『加茂遺蹟』三田史学会
J.グロード・篠遠喜彦、1952、『姥山貝塚』日本考古学研究所

※巻頭連載は隔月です。次回は再び神村先生です。

目　次

■阿玉台式土器　阿玉台式土器の研究史(2)　塚本師也…1
■考古学の履歴書　良き師・良き友に恵まれて（第6回）　渡辺　誠…2
■リレーエッセイ　マイ・フェイバレット・サイト（第103回）　松田　度…3
■考古学者の書棚　『日本中世に何が起きたか』　森田義史…4

考古学の履歴書

良き師・良き友に恵まれて（第6回）

渡辺　誠

7. 抜歯風習の研究

普段は楽しく縄文の勉強をしていたが、やがて大きく立ちはだかってきた壁が修士論文である。

東洋史にいて日本国内の縄文というのは、どう考え立って両立は難しい。さんざんない知恵を絞った結果、抜歯の風習ならどうにかなるかなということになってきた。

その当時の一般認識は、東南アジアから伝わったというのがほぼ定説であった。そしてまず縄文・弥生時代の抜歯のみられる人骨の集成から着手した。しかし大学の図書館には文献がない。この時大変お世話になったのが、東大の渡辺　仁先生である。先生のカードをお借りして、東大の図書館にはいり、コピーもした。当時コピーは今のように気楽にはできず、申込用紙に記入して係の方に申請した。やがて館内のアナウンスで、渡辺先生コピーができましたので取りに来て下さい、と流れたので行ってみると、とても変な感じと思われたみたいで、恥ずかしい思いをした。

それでも『人類学研究』という定期刊行物は、なかなかみられなかった。しかし赤門前の古本屋には1冊だけあった。九州大学医学部解剖教室の出版物であった。これにはこの刊行を進めた金関丈夫先生達の人骨の報告が多かった。そして解剖学教室を訪れると、永井昌文先生がおられ、非売品であるからといって、書庫に保管されていた別刷のなかから、必要な分をすべて出してきて頂いた。この時の作業には佐野　一先生であった。両先生が初対面の学生に対して大変親切にして下さったことは、とても嬉しいことであったし、将来自分も先生方のようにしなければと強く思ったことである。こうして出来上がったリストを利用されることはありがたいが、苦労を労れたことはほとんどない。努力を評価して下さったのは、後に述べるように清水潤三先生だけであった。

問題は編年的な整理をして、渡来説が本当に証明できるかどうかということであった。しかし結論は縄文中期末に仙台湾で発生し、後期初頭に関東地方に南下し、後期中葉にようやく九州東部にまで伝わり、阿蘇山を越すのは晩期になってからであるということになった。これで修士論文としてパスすることが難しくなった。審査結果が不明の段階で、九州へ発掘に行く道具類をリュックにつめていたら、そんなことは後輩に任せて、ちょっとおいで、と言われたのが清水先生である。

反対意見が多かったが、私が弁護して落ちないようにしたからね、ということであった。その根拠として、国内人骨の集成は完璧に近いこと、その編年的位置づけも間違っていないこと、さらにどうしてもということであれば、東南アジアなどにおいて日本より古い抜歯人骨を提示すべきであると強調して下さったとのことであった。とてもありがたい援護射撃であった。

また学外では、縄文土器編年の大綱を作られた山内清男先生だけが、自分の編年表に忠実だから、いい結果が出たのだと言って喜んで下さった。そのうえ抜歯の盛んな台湾の山地民族についての、貴重な報告書である『台湾警務局統計』を貸して下さった。この本を持っている人は、関係者では金関先生だけだろうとも言われたくらいの貴重書である。

山内先生は、台湾の山地民族の文化は縄文のそれとよく似ているので、関心をもたれていたらしい。しかし縄文には焼畑農業はないからねと言ったのに、藤森栄一先生の縄文農耕論に関係したとして、烈火のごとく怒られて破門宣告を受けた。そして最後まで破門はとけなかった。

渡来説を否定して自生説を提唱した次の課題は、発生地域とする仙台湾地域の検討である。この地域にどれほどの文化的背景が認められるかということである。そのために大きな比重をかけて研究したのが骨角製漁具である。

これは楽しかった。何よりもよかったのは、江坂先生と大変親しい石巻市在住の楠本政助氏を紹介して下さったことである。楠本氏は多数の資料を持っているばかりでなく、それらと同じ漁具を作って実際に魚をとり、魚とりの実際にものすごく詳しい方であった。特に釣針や銛類に限定し、朝早くから夜まで約80点実測させて頂いた。

また有利だったのは、江坂先生のお供で、岩手県三陸地方の大船渡市下船渡貝塚、同大洞貝塚の発掘に参加していたことである。これに前後して大船渡市や陸前高田市、および宮城県気仙沼市の資料館、後には東北大学考古学研究室においても、多量に実測を進めることができた。

これらの調査結果として、東関東地方の内湾性漁業センターに対し、三陸南部から仙台湾にかけては外洋性漁業センターを形成していたことが明らかになってきた。この時期が縄文中期中葉で、抜歯の出現はこれに続く中期末だったのである。さらに両者は一体となり、後期には関東地方から東九州にまで伝播するようになるのである。特に鹿角製釣針にこのことが顕著であるばかりでなく、晩期になると同じコースをたどってはなれ銛も伝播している。

さらに興味深いことに、かつて中期と後期の土器の違いは、後者における磨消縄文の発達が説かれていたが、これも抜歯・漁具と一体のものであり、その他にもさまざまな遺物が南下しているのである。そして西から東へ伝播するものはほとんどない。まして南から抜歯風習が伝わったとは到底言えなくなったのである。これで私の修士論文は一区切りついた。

この磨消縄文技法については、京都の平安博物館時代の上司であった磯崎正彦先生からの御指導があった。磨消縄文というのは地文として全面に縄文がつけられていて、その上に線で区画した内部を磨り消すのであるが、縄文後期の土器のはそうではない。先に区画があり、その中を縄文で満たしていくのである。すなわち充填縄文と呼ぶべきであるという御教示であった。

これは宮崎県まで南下すると、充填貝殻文へと変化する。とても逆は考えられない。そして仙台湾方面にもどると、中期後半の土器には充填縄文がおおいのである。漁具などにより普遍的資料で、抜歯

略歴

昭和13年11月18日	福島県平市大町（現いわき市）に生まれる
昭和32年3月	福島県立磐城高校卒業
昭和33年4月	慶應義塾大学文学部入学
昭和43年3月	同上大学院博士課程修了
昭和43年4月	古代学協会平安博物館勤務
昭和54年8月	名古屋大学文学部助教授
平成元年4月	同上教授
平成14年3月	同上定年退職、同上名誉教授
平成15年4月	山梨県立考古博物館々長・同埋文センター所長（18年3月まで）
平成18年7月	日本考古学協会副会長（平成22年5月まで）

の自生説をさらに強化することができたのである。

この後期初頭における東北地方からの文化伝播に対し、漁具などへの理解が少ないため、西日本から伝播を考えた先生もおられたが、実態は逆だったのである。

隔月連載です。次回は石井則孝先生です。

リレーエッセイ

マイ・フェイバレット・サイト 103

井辺八幡山古墳 ～ 和歌山県和歌山市

松田　度

私が埴輪に興味を持ち始めたのは、同志社大学大学院に在籍しながら、同大学歴史資料館でアルバイトをしていた2000年の1月頃だった。当時、資料館に辰巳和弘さん（元同志社大学教授）がおられた。

辰巳さんは、私の埴輪研究の恩師である。辰巳さんに仰せつかったのは、資料館が所蔵している、1969年に同志社大学考古学研究室（当時・森浩一教授）により調査が実施された、特別史跡・岩橋千塚古墳群内の井辺八幡山古墳からみつかった形象埴輪を分類し、調査報告書との照合関係をチェックして収納し直す、という作業であった。破片になった形象埴輪から、どのようにもとの形を想定してゆくのか。辰巳さんからその「極意」を伝授された（辰巳さんも古墳の調査に参加した「学生」の一人である）。

同年3月、大学院の修士課程を終え、博士課程へと進むことが決まった。そのあとの辰巳さんの一言が「お前、松阪へ行かんか」。そこで、これまで見たこともない埴輪が待っていることは後で知った。

同年4月から2年間、大学院に籍を置きながら、三重県松阪市で一人暮らしをはじめた。国史跡・宝塚古墳の整備にともなう発掘調査と、みつかった埴輪の整理、実測、データ化の作業を、松阪市文化財センターの職員のみなさんと、ひたすら続けた。この時、井辺八幡山古墳の埴輪を整理した時の経験と「勘」が大いに役立った。まだ日本で1例しかみつかっていない「井戸とその覆屋を表現した囲形埴輪」を復元できたのも、その「勘」のおかげである。これらの埴輪は、著名な立ち飾りのある船形埴輪などとあわせて2006年、国の重要文化財に指定。松阪市文化財センター「はにわ館」で保管・展示されている（調査報告書は2005年に刊行）。

2002年6月、同志社大学歴史資料館の調査研究員（嘱託）という名目で母校へもどり、今出川キャンパス内の発掘調査にあけくれた。興味は次第に、中・近世の京都を舞台とする公家・武家・寺院の考古学的研究へと移った。埴輪の事は忘れかけていた。2004年に大学院博士課程を退学。2005年3月に退職。

時は就職氷河期である。研究は好きでも試験勉強が苦手な私は、競争倍率の高さについてゆけない。これからどんな仕事につこうか、研究を続けてゆくべきなのか、自分の人生に迷いながら、そのときにふと思い浮かんだのが、井辺八幡山古墳の埴輪だった。

当時の考古学界では、大王墓と目される国史跡・今城塚古墳（高槻市）や、井辺八幡山古墳と同じく特別史跡・岩橋千塚古墳群内にある大日山35号墳の形象埴輪が、古墳の中堤や造り出しで並んでみつかったことや、その埴輪配置の解釈が大いに話題となっていた。井辺八幡山古墳は調査年こそ古いけれど、それに負けないだけの情報量と考古学的意義をもっている。それをはっきりと世に出して問うことが必要だと思い立った。

2005年12月、有志で「井辺八幡山古墳検討会」、通称

▲検討会のようす（2006年 筆者撮影）

◀「女子（西4号人物）の手のひら」にのる「捧げもの」（2012年 筆者撮影）

「いんぱち」（註）を発足。月一回、辰巳和弘さんをたよって、資料館の展示室に有志があつまり、展示ケースの下に収納されている埴輪のコンテナを引っ張り出してきて、破片と調査時の原図を見比べながら議論をした。また度々、古墳のある現地の山塊を歩き、調査当時に学生だった諸先輩に聞き取りをしながら、調査の背景にあった苦労と困難を追体験した。

検討会の成果は、2007年に同志社大学歴史資料館から公刊（資料館HPよりダウンロードできる）。辰巳さんへのお礼（還暦祝）を兼ねていたが、何とか間に合わせたというだけで、課題は多く残った。続けて2008年4月、私も漸く、奈良県吉野の小さな自治体に就職を果たした。

とくに2009年以降、「いんぱち」の成果が各方面で採りあげられるようになり、井辺八幡山古墳は、まさに40年ぶりに息を吹き返しはじめた。

井辺八幡山古墳の考古学的意義については、既に各方面で紹介されているので多くふれないが、埴輪研究史上、日本考古学史上においても有数の重要遺跡だと思う。しかし、意外なことに、みつかった形象埴輪の大半は未指定文化財なのである。唯一「男子立像埴輪（いわゆる力士の人物埴輪）」一躯が、和歌山市指定文化財になっているだけである。

古墳も調査後、現地に残されている。横穴式石室と目される、未調査の埋葬施設もそのまま保存されているはずである。しかしそこは私有地で、見学者への対応は考慮されていない。ほの暗い竹藪が一面を覆い隠し、埴輪群像がどこに立っていたのかを想定することすら困難である。同じ岩橋千塚古墳群の範囲内にあって、史跡整備が進められている「特別史跡範囲内」の古墳との扱いの差は歴然としている。

むろん、行政・研究者の価値観と遺跡の価値は、同一ではない。井辺八幡山古墳については、遺跡としての価値は国史跡級、出土資料も一括で県指定クラスとみてよいが、未指定

のまま放置されている現状は、井辺八幡山古墳が歩んできた約40年間の暗道、私たちの問題意識の暗示ともいえる。

こんな悪条件のなかでも、日本考古学史に異彩を放っている井辺八幡山古墳は、まさしく私のフェイバレット・サイトである。この遺跡をこれからどうやって守り伝え、地域文化財として活用してゆけるか。先達から「いんぱち」を引き継いだ私の、生涯にわたってとりくみたい課題でもある。

註：「いんぱち」の名は、検討会メンバーの一人である関真一さん（大阪府教育委員会）の提案による。当初は「なんやねん、それ」との懸念もあったが、いまでは「関西の考古学」らしいネーミングだと、好んで使っている。

※次回のマイ・フェイバレット・サイトは河森一浩さんです。

考古学者の書棚

「日本中世に何が起きたか　都市と宗教と「資本主義」」

網野善彦／洋泉社MC新書（2006）　森田　義史

目次

序にかえて
　絵師の心　一遍と「乞食非人」
Ⅰ　境界
　境界に生きる人々　聖別から賤視へ
　中世の商業と金融　「資本主義」の源流
　市の思想
Ⅱ　聖と賤
　中世における聖と賤の関係について
　中世における悪の意味について
Ⅲ　音と声
　中世の音の世界　鐘・太鼓・音声
Ⅳ　宗教者
　一遍聖絵　過渡期の様相
あとがきにかえて
　宗教と経済活動の関係

網野善彦はその著書『無縁・公界・楽―日本中世の自由と平和』（平凡社1978）で歴史学界はもとより一般社会にまで大きな影響を与えた中世日本史家である。「無縁」という概念を武器に非農業民に光を当て、それまで通説となっていた中世社会の在り方に疑問を投げかけた。その論説は本書にも一章を割かれている差別意識の問題や天皇と「日本」の認識について、女性の社会的位置など多岐にわたる。その中でも最も考古学と密接に絡むのは流通経済についての部分である。

本書のI章中世の商業と金融の項から氏の中世流通史像を読み取ってみる。まず、従前の中世社会史像は田畠を基盤とした自給自足体制であり、在地領主が百姓=農民を支配する封建社会だというものだと考える。しかし、ふつう考えられているより早く、具体的には中国から銭が流入する以前から米や絹・布が年貢や為替手段として用いられ、貨幣経済の姿を見出している。さらに物流の担い手として得意の非農業民、神人や山伏、海人といった人たちが中世初期から資料に姿を見せていることを紹介している。それだけでなく、通常百姓=「農民」とされる人々の中にも様々な商品作物を年貢として納めている丹波国大山荘や製鉄を主な生業とする新見荘を例示し、前述の中世社会像は大きな誤りであると断言している。言い換えれば、「封建社会」としてくくられてきた社会のなかに確実に「市場原理」が見られ、それは「資本主義」の源流ではないかと述べられている。

瑞巌寺境内遺跡で検出された建物跡

私は中世考古学を専門としており、これまで出土する土器・陶磁器類から当時の流通を探ろうと試みてきた。遺跡からは貿易陶磁や瀬戸・常滑といった広域流通する国産陶器から、より在地的な土師質土器まで様々な流通範囲をもった品物が出土し、一定の出土遺物量があればその遺跡の性格が推定できると考えられる。もしくは現在の県単位のような範囲で出土例を集成すれば、広域的な出土量といった視点で流通量の寡多を論じることができるだろう。しかしそこから先、中世がどのような社会だったのか、を探るのは容易ではない。城館跡では武家儀礼の痕跡としてかわらけの大量廃棄遺構があり、座敷飾りであっただろう青磁や白磁などの高級品が出土する。寺院跡であれば礎石建物が検出され瓦が出土する。では一般集落はどうなのか。古代や近世と質の違いは見出せるのか。また、中世考古学では「都市的な場」という表現がつかわれることが多い。文献資料には「市庭」の記述があり、私の現住所の近郊にも中世に市場であったと想定されるところがある。しかし、特異な遺構や遺物の出土はまだ見出されておらず、中世の流通・経済像に迫る新たな成果はいまだもたらされてはいない。

もちろん古文書を扱う狭義の歴史学者と「物言わぬ」資料である考古資料を扱う我々が生み出す学問的成果には大きな差異があって当然である。しかし、考古学が広義の「歴史学」であるとして自らを規定するのであれば目指すもの、あらたな「歴史像」の構築という目標は同じでなければならない。日々、一点一点の資料と向き合い、細かな調整や胎土の観察を繰り返すことに疲れてしまう時がある。そんな時は氏の魅力的な論考に再び目を通す。するとこの膨大な作業から読み取る小さな事実の積み重ねが、いつか大きな歴史的解釈の土台になるであろうと自らを奮い立たせることができたのである。

また余談であるが、網野氏が一節を割いて論考を展開している「一遍上人絵伝」であるが、たまたま私が調査することになった瑞巌寺境内遺跡に深く関わっているのである。というのは一遍上人が松島の円福寺を訪れており、絵伝にもその伽藍が描かれている。昨年調査した地点からは五間堂と思われる礎石建物や、禅宗寺院特有の「四半敷」という床構造をもった建物が検出されており、絵伝に描かれた円福寺の姿が誇張ではなかったことが明らかになったのである。偶然ではあるが、本書をまた読み返してみることとなった。

解説を寄稿した保立道久曰く、「本書は網野善彦氏の歴史学の全体像を知るのにもっとも適した本である。」是非一読をお勧めする。

アルカ通信　No.110
発行日　2012年11月1日
発行人　角張淳一
発行所　考古学研究所（株）アルカ
〒384-0801
長野県小諸市甲49-15
TEL 0267-25-0299
aruka@aruka.co.jp
URL：http://www.aruka.co.jp